

ISSN 1880-5914

二松学舎大学21世紀COEプログラム
「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」

日本漢文学研究

創刊号

二松学舎大学21世紀COEプログラム

日 本 漢 文 学 研 究

創 刊 号

《 目 次 》

創刊号に寄せて	今西幹一...
『日本漢文学研究』のめざすもの	佐藤 保...
論 文	
興福寺蔵『因明義断』裏書にみえる古辞書類の引用について	河野貴美子... 1
日本における『禅源諸詮集都序』の受容と出版	會谷佳光... 25
天王から天皇へ	角林文雄... 53
「天津水影」考	
『日本書紀』一漢字表記の訓詁をめぐって	王 小 林... 69
群馬の漢文碑読解上の諸問題	濱口富士雄... 93
「四端」と「孝悌」 仁斎試論	田尻祐一郎...121
『刺青』と漢文学	杉下元明...143
研究ノート	
国立歴史民俗博物館本『千載佳句』について	後藤昭雄...159
資料紹介	
在外日本漢文資料探訪 上海・杭州	町 泉寿郎...169
伊藤忠岱書写日本漢文関係資料目録	清水信子...207
重要文化財『東帰集』(伝仏乗禅師自筆) 翻刻と解説	根木 優...259
書 評	
李慶著『日本漢学史』(三巻)	小川晴久...307
執筆者紹介	...312
編集後記	...313
投稿要領・原稿作成要領	...314
<hr/>	
掲載論文要旨(英文)	...325(86)
学界動向	
中国における日本漢学の研究	王 宝 平...342(69)
論 文	
<i>A Record of Seven Generations</i> Fragments of Bodhidharma, Huisi, Prince Shōtoku, and Jōjin	ロバート・ボーゲン...370(41)
Itō Jinsai on the <i>Analects</i> of Confucius: A Type of Confucian Hermeneutics in East Asia	黄 俊 傑...410 (1)

創刊号に寄せて

二松学舎大学長 今西 幹一

二松学舎大学（以下「本学」）は、明治十年に漢学塾・二松学舎として発足しました。明年、平成十九年は創設百三十周年を迎えることになります。その後、専門学校を経て新制大学の一に数えられるようになりましたが、その間「国漢」の二松学舎として揺るぎない学統を有し、これを誇りとして参りました。「国漢」は対立概念としてではなく、「国」もまた日本古典の教育研究を旨としていましたから、その間に径庭の隔たりのない一体化したものであったと思います。いわゆる「東方」の学としての意識はあったものの、日中古典を基軸に、人格陶冶、ひいては国家社会の秩序維持のための経略に繋がる才覚の形成に欠かせない学として見据えられていたものと思います。本学は長く国文学・中国文学の二学科よりなる文学部単一学部で過ぎて参りましたが、平成三年には国際政治経済学部を設置しました（現在はいずれも大学院研究科を設置）。国際政治経済学部は、当初は汎世界的な国際政治経済学の教育研究を自論んでいましたが、経年とともに東アジアの政治経済に重点を置くようにシフトあるいはスタンスを変えて参っております。これも先の「学統」からのおのずからなる収斂かと思われまます。

本学が平成十四年度に、「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」において、文部科学省から二十一世紀COEプログラムの一として採択、指定されましたのも如上の本学の発足と沿革からして至極自然な結果に思えます。五年間に亘るプログラム・プランなので、本年はその三年目、中間点にあると言えます。

これまで、内外の研究者の、汎世界的な結集、協同の組織化を図り、また若手研究者の育成にあたって参りました。また、

国内外の大学・図書館・研究機関の「日本漢文学」に関わる文献資料類の所在を確かめネット化し、文献資料の蒐集にも力を傾けて参りました。さらに、「日本漢文学」に関わる国際シンポジウム、公開講座・講演を開催し、定期的に研究従事者の研究成果の報告会を催しても参りました。加えて、昨今のわが国の教育、研究の世界における漢文・漢文学の衰退気味な状況を踏まえ、中国古典の教育の場、社会での賦活を図るべく、平成十七年度に大学主催で論語の第一回のシンポジウムを開き、側面より支援を図って参りました。幸いこれらの研究・調査は着実に成果を上げて来ており、また諸行事の反響も大きなものがありました。これらを通して日本漢文学研究の基盤を強化し、まこと「世界的拠点の構築」が成されつつあるものと思えます。

如上の経過、成果を踏まえて、当初計画どおり研究機関誌『日本漢文学研究』の創刊に至りました。これによりスタッフ個々の研究・調査の成果の文献への定着が計られ、真の公表が可能になります。更に情報として蓄積し、その偉業の共用が可能になります。また日本漢文学研究の活動・動向の彙報の役目を果たすことになります。そしてCOEの重要な使命である、次代の研究後継者の登龍門として研究成果の発表の場としての役割を果たし得るものと確信する次第です。

創刊号には、日本漢文学研究の論稿七本を初め、研究ノート、資料紹介・学界の動向の報告類、書評等の稿六本を掲げ、分厚なものになりました。倍多の投稿が集まり厳正な審査の上での採用となりました。採否に関わらず玉稿を寄せていただいた各位に対して感謝し、また本学COEスタッフの尽力に対して慰労の意を表します。この『日本漢文学研究』の発刊が本学COEプログラムの推進に大いに力を付与してくれるとしても、プログラムそのものはやつと軌道に乗ったばかり、気を引き締めて取り組んで行く所存です。また号を重ねるごとに『日本漢文学研究』の充実して行くことを期する次第です。

ひとしなみに漢字文化圏と言いますが、公用字の簡体字化、あるいはハンダルの採用など、国によってはそのあり様に大きな変容が生じております。古典漢籍の受容、撰取に断絶も生じかねない状況です。そうした中、わが国は、漢字を基に二種の仮名を創出し和文表記の方法を見いだし、また独自の漢字文献の訓読を開拓し、徳川幕府治下の泰平の世に藩幕合わ

せて儒学を中核に独自の漢学を築き上げて参りました。国学（日本学）、蘭学と合わせて、競合融和しながらのものであります。「日本漢文学」の「日本」は狭域化するものでなく、漢文学そのものを示唆するものと思えます。私事になりますが、昨年十一月、錦繡の韓国で開かれた韓国日本語文化学会に講演に参りました。学会場となりました大学の門前、校庭が親子連れで非常に混雑し、通り抜けるのに難儀を来しました。何事かと聞くと、漢字検定の試験があるとのこと。年々人気を博し、受験者がそれこそ右肩上りに加増しているとのこと。国粹的にハングル絶対の韓国でのこの実状。近代の合理主義のなかで、あるいは文字の機器への適用の上で疎外されていた漢字が、機器の電子化に伴い表記、印字が容易になり、あるいはその文字記号としての識別性で優位になり、時にその芸術性において、完全な復権は無理として、見直されつつあることは事実です。本学の日本漢文学研究の可能性について思いをさまざまにするものであります。

『日本漢文学研究』のめざすもの

前総括責任者 佐藤 保

本誌『日本漢文学研究』の創刊に当たり、本誌の母体である二松学舎大学二十一世紀COEプログラム「日本漢文学研究」の世界的拠点の構築」の計画立案に最初から加わっていた者の一人として、本プログラムが採択されるに至った経緯と、本誌のめざすものについて、簡単に記しておきたい。

我々二松学舎大学は、文部科学省の二十一世紀COEプログラムの構想が公にされた直後から、石川忠久前学長を中心に応募の準備に取りかかった。私が参加した最初の会合は、平成十四年（二〇〇二）二月であったと、記憶する。

COE構想は、当初、一件当たりの高額な援助金と、「トップ・サーティ」top thirty という言葉が流行したように、日本の国公私立大学の分野別格付けの面のみがことさらに喧伝されたが、実は、このCOEのねらいは、大学の個性化と研究教育水準の高度化をめざすものであること、特に大学院の研究教育の活性化を目的とすることは明らかであった。そこで我々は、COEへの参加が、二松学舎大学の研究教育の改革、活性化を行う絶好の機会であるにとらえ、本学の個性とこれまでの研究教育の実績をいかにCOE構想に結びつけるか、その検討を始めたのである。

平成十四年（二〇〇二）の第一回の公募締切まであまり時間的余裕はなかったが、早い段階で、本学の研究教育拠点形成は「日本漢文」の分野で計画する以外にはあり得ないことが、比較的容易に決まった。なぜならば、本学は開学以来、建学の理念として東洋の精神文化の伝統を継承し、古くから「国漢の二松」と自他ともに認める実績をあげているので、「日本漢文」が最も本学の特色を発揮するのにふさわしいと、全学の考えがすぐにまとまったからである。しかしながら、問題は日

本漢文の研究教育拠点をどのように構築するかである。我々は検討のすえに、漢文による研究教育法の開発と漢文文献のデータ・ベース化を目的とする「日本漢学研究教育法及び文献センターの構築」を計画して、「人文科学」の分野に提出した。だが、結果は不採択となった。理由は、研究の意義は認められるが、計画の具体性を欠き実現は困難であろう、というものであった。

その指摘は、我々としても十分納得の行くものであったので、二年後の再度の申請に備えて、大学院カリキュラムの整備と大学全体の研究教育体制の改編を行い、さらに事業推進担当者の充実をはかった。それと同時に、我々が研究教育の対象とする「日本漢文」又は「日本漢学」「日本漢文学」とは何か、を問い直す議論を重ねた。

議論の前提には、近代以前の日本の学術文化は漢文によって成り立っていること、漢文抜きでは日本の学術文化は存在し得ず、且つまた漢文の知識抜きでそれらの理解はあり得ない、という、我々全員のほぼ共通する認識があった。その上で、日本における中国学の伝承と日本漢学の関係、日本語・日本学と日本漢文との関連、教科(国語古典)としての漢文、漢文文献の範囲等々、議論は多岐広範に及び、本プログラムの事業推進担当者の間でもいまだに用語と概念の一致を見ていると言いがたい。それは、「漢学」「漢文」「漢文学」から受け取るものが、人によってさまざまに異なるからである。だが、厳密な定義はともかく、我々が研究教育の対象とするもののイメージはおおよそ次のようなものとして、ほぼ共通の理解ができてきつつある。

古来、日本人が古典中国語を日本語で読み下す日本独自の訓読法によって摂取してきた中国学のあらゆる分野の著述、且つ又古典中国語を模倣して表現してきたあらゆる分野の日本人の著述。

言うまでもなく、古典中国語とは漢字を媒体とする中国語の古語、それも書き言葉を主体とするものであり、東アジア漢字文化圏にあつてはかつて共通に用いられていた文体である。東アジアの各国はその文体を各国独自の読法(訓読法)で撰取し、「日本漢文」「朝鮮漢文」「ベトナム漢文」などが生まれた。いずれも中国学と密接不可分の関係にありながら、中国学

とは明確に異なるところが「〇〇漢文」の難しいところであり、興味深い点でもある。

用語だけの面から言えば、私の個人的な感覚かもしれないが、「漢学」というと、「中国学、経学を主とした学術」といった色彩がよくなるように思うし、「漢文学」の場合には、漢詩漢文の文学面だけが強調されてしまう。実際には、訓読法を基礎とする「日本漢文」によって支えられている諸学問・諸芸術・諸文化すべてを対象とする学問と書いたものであるが、それをどのように表現すればよいのか分からない。議論を重ねた結果、「日本漢文による学術文化」という意味で「日本漢文」＋「学」と、いささかこじつけめいた命名により、新たな研究教育拠点計画の作成に入った。それが、平成十六年（二〇〇四）に申請した「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」である。

平成十四年に始まった文科省の二十一世紀COEプログラムは、平成十四年度・十五年度で十分野にわたり合計一〇六大学、二四六件の研究教育拠点を採択し、平成十六年度は総括的な分野として「革新的な学術分野」一つで募集が行われたのである。この年の申請は一八六大学三二〇件、採択は二四大学二八件、我々のプログラムは、以下の理由を付して採択された。

「記紀時代より戦前まで、漢文またはその読み下し文は日本の叙述作品の過半を占め、日本文学の中心軸であったにもかかわらず、戦後は日本文学の対象としては疎んじられ、また、漢文の読解そのものも中国語の普及とともに、衰退しきつている。これは日本文化の理解のためには、極めて危惧すべき事態である。二松学舎大学はこの趨勢の中で、漢文教育を堅持している希少な大学である。日本学としての漢文研究を振興するために、本拠点形成計画は極めて重要である。」

この評価は、我々を大いに勇気づけてくれた。

かくて、本プログラムは平成十六年の後半から動き始めたが、計画推進に当たって、我々は次の四つの柱を立てた。

第一は、日本漢文学に関する文献学又は書誌学的な事業であり、関連文献の所在調査を国際的な規模で行い、これらの文献情報をデータ・ベース化して公開することである。この事業は、他の諸機関・コレクションのデータ・ベースとのリンク

によってデータの量と質の拡大充実をはかり、いわば日本漢文学研究のための基礎的情報の世界的拠点づくりである。なお、この計画の中には、研究文献目録及び基礎的文献の本文のデータ・ベース化をも含んでいる。

第二の柱は、研究者の国際的なネットワークづくりである。国内外の日本漢文学の専門研究者を広く招聘して行うシンポジウムや公開講演会、及び関連する国際会議や研究集会等への本プログラム担当者の派遣等により、研究者相互の情報交換と共同研究を行うものである。本誌『日本漢文学研究』の刊行は、ここに属する事業である。

第三は、大学院研究科の通常講義・演習並びに学外の人々にも公開する特別講義・演習等による若手研究者と書誌専門技能者の養成である。COE研究員として若手研究者を養成することをも含む。

第四の柱は漢文教育で、日本における漢文教育の歴史的研究、各国の漢文教育（日本古典又は中国古典）の比較研究、さらには大学で使用する漢文教育のテキスト（漢文教科書）の編纂を行う。

上述のように、本誌は直接的には第二の柱の研究者のネットワークづくりに属するものであり、我々事業推進担当者のみならず国内外のこの分野の研究者が、研究・調査の結果を国際的に交流し合う場を提供することが主たる目的である。当然、本誌の内容は上記四つの柱全体にかかわるものである。本誌を通じて、日本漢文学研究のネットワークが広がり、本学がその世界的拠点としての役割をはたし、日本漢文学研究が一層深化し高度化すること、これが本誌刊行のねらいである。

なお、本誌の用語は、日本語と英語を使用する。編集の過程では中国語を加えたらとの意見が出されたが、あえて日本語と英語に限定したのは、日本漢文の研究者で中国語を解する人はまだ少数であろうとの判断による。